

北九州市立大学
文学部紀要

第89号

「中古品、少し書き込みあり」

岩本真理子 ……………57

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2019

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 89 March 2019

“Gebraucht, einige Eintragungen”

Mariko IWAMOTO57

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2019

「中古品、少し書き込みあり」

岩本 真理子

これは論文ではなく、古本に関する体験談のようなものだ。古書店めぐりが好きという人ならば、似たような体験をした人も多かるう。

以前は古本は自分の脚と目を使って探すものだった。古書店は、いや古本屋さんという言い方が好きだが、本好きにとっては宝の山だ。私も地元はもちろんのこと、出張先で古本屋を見つけるととりあえず中に入って、何か面白い本はないかと探していた。特に東京出張では神田の古書街に行くのが最大の楽しみだった。一軒ごとに得意分野が違うので面白い。江戸時代の木版刷りなども大量においてある大屋書房に行くたびに思い出すのが、国文学研究者の中野三敏先生が若い頃、神田の古書街で江戸時代の文献を買い占めてしまうので、他の人が研究ができなかったという話だ。中野先生は私が九州大学で独文学研究室助手だった時に文学部長だったし、福岡大学でも偶然お目にかかったことがあるし、数年前には比較文学会で特別講演をいただいた際にもお会いしたので、お顔もよく存じ上げている。先生は私のことなんか覚えておられないだろうが。大屋書房は古地図や浮世絵のレプリカも販売していて、これなら安月給の助手でも手が届いた。古地図のレプリカを見てみると、同じように古地図を漁りにきていた知らないおじさんが突然、「ほら、昔は江戸城の目の前が海だったんだよ。黒船が来た時に大騒ぎしたのも当然だろう？大砲ぶっ放されたら大変だよ」などと説明してくれたこともあった。

古本屋巡礼には体力と時間が必要だ。今では古本もネットで簡単に探すことができるのでありがたい。もちろん店に行けば、探していたものとは別の思いがけない掘り出し物に出会えるチャンスもあるから、実際に店を訪れる面白さもなくなったわけではない。ネットで古本を探す時には誰でも本の状態をチェックするはずだ。「可」、「良い」、「非常に良い」など成績表のような分類をまずチェック。書き込みなどがなされていないかどうかも重要だろう。「箱にキズはありますが、本文は書き込みなどなくきれいです」と書かれていれば、買おうかなという気にもなる。もっとも、どっさり書き込みがある本が売りに出されることはあまりないと思うが。その意味で、価格が「1円」などというのはかえって怪しいから買わない。

私は Amazon か「日本の古本屋」というサイトで検索をすることが多いが、「日本の古本屋」では本の状態を写真で提示している店も多い。洋書の古本を探す時にはカナダの Abe Books で検索する。この店は世界各国の古本屋とネットでつながっているの、英語の本を検索するとアメリカやイギリス、ドイツ語の本を検索するとドイツ、オーストリア、スイスなどの古本屋が所有する本

の詳細が示される。こちらも写真が掲載されていることが多いので、本の状態がよくわかる。以前はドイツの Amazon も利用していたが、こちらが住所を変えたわけでもないのに突然「配送できませんでした。送り先住所をご確認ください」というメッセージが届き、再配達を依頼してもまた同じ結果になるというトラブルが続くようになった。何でもデジタルで処理する相手にアナログな苦情を言ってもしょうがないよねと思い、イギリスの Book Depository に乗り換えたところ、Book Depository で検索しても見つからない本はこちらでどうぞ、とリンク先として紹介されていたのが Abe Books だった。Abe Books は面白すぎてつい夢中になり、時の経つのを忘れてしまうので（目が悪い私は目が痛くなってギブアップするのだが）、時間のない方にはお勧めしない。

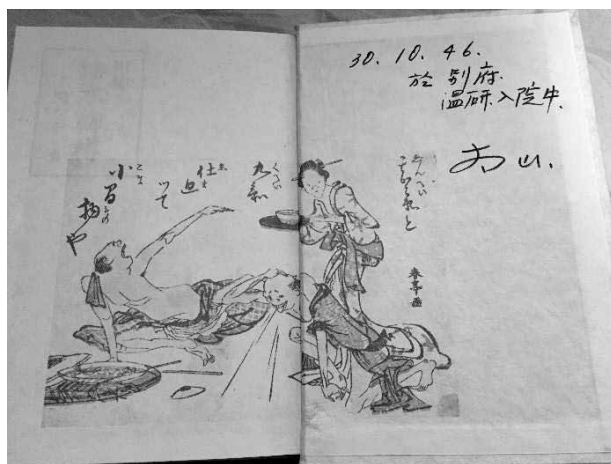
ところで先程、「書き込みなどがなされていないかどうか」が重要だと書いたが、実は書き込みが重要な場合もある。そこがビミョーなところだ。

『絵本柳樽』

随分前になるが、まだ脚力と視力に頼って古本探しをしていた時に一冊の面白い本と出会った。『絵本柳樽』だ。私は江戸文学、特に川柳、狂歌、黄表紙などが好きなので、古本でその手のものがあるとつい購入する。これは地元の古本屋で見つけたが、写真①のように、楽しい絵を眺めながら崩し文字の読み方も覚えられるという一石二鳥的なところが非常に気に入った。それともう一点、買う時すでに気づいたことなのだが、見返しに書き込みがある。写真②がその書き込みだ。これを見た時、はっとした。きれいな字だ。なんとなく所有者の人柄を偲ばせる。別府の「温研」



写真① 『絵本柳樽』本文



写真② 『絵本柳樽』見返しの書き込み

とは九州大学温泉治療学研究所のことで、現在は九州大学病院別府病院という名称になっている。「入院中」とあるが、何の病気だったのだろうか。回復したのだろうか。名前は「大山」かとも思ったが、点が打ってあるということは「太山」だろうか。しかしさらに注意をひいたのは一行目の数字の書き方だ。「30、10、46」。この本は昭和44年出版なので46は昭和46年のことだろう。するとこれを読み始めた、あるいは読了したのが昭和46年10月30日だったと考えられる。気になったのは日、月、年の順に書いていることだ。イギリスを始めて、ドイツ、フランスなどヨーロッパではこの順番が普通だ。もちろんヨーロッパ言語に馴染んでいる者ならば、年のところには西暦を書きそうなものだが。場所が場所だけに、所有者は九州大学関係者だった可能性が高い。病気療養のために温研に入院し、退屈しのぎにこの本を読んでいた人の姿がおぼろげに浮かんでくる。その人の人生にほんのわずか触れたような不思議な気分させられる。

鷗外文庫とヘルン文庫

ところで、私は元々ドイツ文学を専門分野としていたのだが、非常勤先でさまざまな分野の先生方と知り合いになるうちに比較文学の世界に足を踏み入れ、かなり前から比較文学会に所属している。何でもありの楽しいカオスのような学会なので、自分では思いつかないような研究テーマに巻き込まれることがある。『森鷗外事典』の作成に誘われたのと、ラフカディオ・ハーンの蔵書調査に誘われたのが、その最たるものだ。

『森鷗外事典』のドイツ関係項目をいくつか担当することになった時は、鷗外の読書歴を確認する必要があったため、東京大学附属図書館の「鷗外文庫」を検索してみた。この文庫の素晴らしい点は、鷗外の蔵書を検索できるだけでなく、彼が書き込みをしたページをデジタルで閲覧できることだ。鷗外はドイツ留学中に大量にドイツ文学関係書を買込み、特に留学初期には蔵書にかなり書き込みをしている。古本ではないが、この書き込みも見ていて楽しい。楽しいだけでなく、研究者にとっては貴重な情報だ。ハイネの『ローレイ』の詩のページには鷗外が韻律の強弱を書き込んでいるのがうっすらと読み取れて、若い鷗外がこの詩を声を出して読んでいたのではないかと思えてきてわくわくする。また、あちこちの余白に「！」や「!!!」と感嘆符が書き込まれていたり、「好罵」、つまり「うまい罵り方だね」などという感想が書かれているのを見ると、鷗外の精神の動きのようなものをありありと実感できる。

ハーンの蔵書調査も比較文学会がらみで実現したものだ。ハーンの『怪談』は子供の時から愛読書で、私が小倉の図書館（現在の北九州市立中央図書館）で初めて借りた、あるいは二番目ぐらいに借りた本が『怪談』だったような気がする。自宅にほとんど本がなかったせいで、早くから図書館通いをしていた。むしろ家庭に本なんかいい方がいいのかもしれない。小学校低学年の時のことなのであまり正確な記憶ではないが、灰色がかったハードカバーの本で、『ちんちん小袴』の話

にあたかも墨が滲んだような筆致の挿絵がついていたのをほんやりと覚えている。ほぼ間違いなく、平井呈一訳だったろう。

富山大学にハーンの蔵書を大量に保管している「ヘルン文庫」があるのは周知の通りだが、ある時、富山大学の中島淑恵先生から連絡をいただいた。ハーンはドイツ文学に関心があったようで、彼の蔵書にはドイツ文学のものが多数含まれる。とりわけハイネを好んでいたようなので、一度蔵書を見学してみたいか？というお誘いだった。元ハイネ研究者としては興味をそそられるお申し出だ。ヘルン文庫の蔵書目録はネットで公開されているので、早速調べて見た。なるほど、予想もしていなかったほど大量にドイツ文学関係の書物がある。ただしハーンはドイツ語は得意ではなかったようで、英語またはフランス語訳ばかりだ。これは実物を見てみたい。ということで中島先生と何度か連絡を取り合って、2017年の4月に初めてヘルン文庫を拝見することになった。

富山大学付属図書館内の一室がヘルン文庫になっている。まずヘルン文庫に入ると、最初の部屋にはハーン関係の研究書、翻訳書その他が多数配架され、貴重な「ちりめん本」もガラスケース内に展示されている。特殊な加工を施して、布地の縮緬のような風合いを持たせた和紙に印刷された本だが、フランスのある図書館では、この縮緬風合いの価値がわからずにアイロンをかけていたケースがあることを中島先生から伺って苦笑した。

ヘルン文庫の部屋は二重構造になっており、奥に「秘密の小部屋」のような一角がある。ハーンが所有していた本はこの小部屋に並んでいる。ハーンの蔵書は来日以前にアメリカで購入したものと、来日後に購入したものに二分される。アメリカ時代のものには Lafcadio Hearn の蔵書印が、日本時代の本の多くには「へるん」という蔵書印、というよりハンコが押されているので、どの蔵書印が押されているかによって購入時期が大体わかるらしい。もっとも、ハンコを作って間もない頃に嬉しがってあれこれ無闇に押したと思われるフシもあるので、絶対的な基準ではないのだそうだ。初めて作ったハンコをあちこち押してみてもにこにこしているハーン的笑顔が偲ばれて微笑ましい。

ハーンはアメリカでは極貧生活を送っていたので、本を買うのも大変だったろう。彼もまた古書店などをめぐっていたらしい。古書とはいえ、貧しいハーンにとって本は宝物だ。丁寧に扱ったと見えて、彼の蔵書は実にきれいで、使い込んだ形跡がほとんどない。アメリカ時代のものの一部は、来日の際に友人に預けていたのだが、その後その友人と絶縁したために本はアメリカに取り残され、かなりあとになってから日本に送ってこられたそうだ。管理状態が悪かったのか、水で濡れたかのように湿気でページ全体がふわふわと波打っているものもある。そういうアメリカ時代の本の中に、ゲーテの『ファウスト』のフランス語版があった。美しい挿絵（ページに直接印刷するのではなく、別刷りのもの）が何枚も貼り付けられている美麗本だ。これも少しばかり湿気を帯びた痕跡があるが、それでも出版当時に美しい本だったかが十分伝わってくる一冊だ。訳者はなんとジェラルド・ド・ネルヴァル。フランスのロマン派作家としても有名だが、パリに亡命したハイ

ネの友人だったことでも知られる人物なので、ハイネ研究をしていた時によく目にした名前だ。ハイネが自分の詩のフランス語版を準備する際には、ネルヴァルのアドバイスも受けたい。晩年のハイネは脊椎疾患の為に8年も寝たきりになり、あまりに長い闘病生活に他の友人たちはだんだん足が遠のく中、ネルヴァルだけがハイネを訪れ続けた。ある日、そのネルヴァルがぱったりと来なくなったと思ったら、パリのとある裏通りで縊死しているのを発見された。ヘルン文庫に残された大型本『ファウスト』のページをめくりながら、ハーン、ハイネ、ネルヴァル、それぞれ比較的短い奇妙な人生を生きた三人の文筆家のことをしみじみ思わざるをえなかった。『ファウスト』の作者ゲーテのことを少しも想起しなかったのは、ゲーテに興味がないからで致し方ない。

ヘルン文庫では、ハーンが所有していたハイネの英語版やフランス語版、またグリム兄弟の『ドイツ伝説集』などに何か書き込みなどがなかったか探してみた。どれも書き込みなどないきれいな状態で、それどころか、日本でまとめて購入した本の中には開かれていないページさえある。昔の本は大きな紙に複数ページを印刷し、その紙を折りたたんで製本した状態で販売されていたものが多い。折りたたまれたページをナイフで切って開けるのが読書の最初の楽しみだったという時代があるのだが、ハーンの蔵書にはそれが部分的に切り開かれていないものがある。最後まで読んでいないという証拠だ。日本に来てから収入が安定したハーンは、若い頃に読んだ作家の作品集や、仕事で使いそうな本などを「大人買い」したらしい。以前読んだことがある作品はもう再読の必要を感じなかったのか、それとも買っただけで安心して読まなかったのか。拝見した本の中には書き込みなどはなかったが、他の本にはまれに書き込みがなされていて、それが貴重な研究材料となるということの中島先生から伺った。そんなお話を聞きながら宝探しのつもりでページをめくっていたら、髪の毛が一本出てきた。淡い茶色で、短めの細い髪だ。思わず「ハーンの髪は何色でしたか？」と尋ねると、図書館情報課の松島さんが「あら、また出てきましたか？」と仰る。髪の毛やらリボンやらが時々本に挟まっているのだそうだ。

ハーンのドイツ語版

こうして富山大学でハーンの蔵書を実際手にとって調査させていただいたあとで、あることが気になり始めた。ハーンがドイツ文学をよく読んでいたことはわかったが、逆にハーンの名前はドイツ語圏で知られていたのだろうか。ハーン作品はドイツ語に翻訳されているのだろうか。これは調べてみるとすぐにわかったことだが、『怪談』その他のドイツ語版が意外と早い時期から出ている。しかもオーストリアの著名な作家ホーフマンスタールがハーン作品集に序文を書いているという。『森鷗外事典』でホーフマンスタールの項を担当した私は、その名前を見ただけでどきどきした。あのホーフマンスタールが？ということは、彼はハーンを読んでいたのか？頭の中でドイツ・オーストリア文学の世界とハーン＝小泉八雲の日本が突然結びついた。これは調べ甲斐がありそうだ

が、どこから手をつけたらいいのやら。ともかくデジタルアーカイブの Project Gutenberg でホームページが書いた序文を読んでみることにした。今はこのようなデジタル情報の入手が案外簡単なので助かる。実際、序文はすぐに見つかった。序文は「私は電話口に呼び出され、ラフカディオ・ハーンが亡くなったことを知らされた。東京で昨日、あるいは今日の未明か朝早くに亡くなったのだ」と始まるので、どうやらハーンが東京で急死した直後に書かれたものらしい。

それはともかく、この Project Gutenberg に掲載された序文に付されていた挿絵がまた気になった。美しい版画だ。誰の作品だろう。これも調べてみてすぐにわかった。版画の作成者はエーミール・オルリク、ユージェントシュティール（ドイツ語圏でのアール・ヌーヴォー）の画家であり、版画家でもあり、蔵書印デザイナーでもあるが、単身日本にやって来て日本の版画の技法を学んだ人物でもある。

これらのことがわかった頃から、もうひとつ気になり始めたことがある。それはこのドイツ語版の翻訳者を知った時に、確信に近いものになった。翻訳者はベルタ・フランツォスという女性だが、彼女については最初のうちはほとんど情報が見つからなくてもどかしかった。しかしそのわずかな情報の中に彼女の素性が含まれていた。ユダヤ系オーストリア人だ。ここで「もうひとつ気になり始めた」ことが明確な形をとり始めた。ホームページもオルリクもユダヤ系オーストリア人で、三人とも主にウィーンで活動している。ハイネ研究をやっているユダヤ人問題は避けて通れないし、また別の理由からウィーンのユダヤ関係史も少しは調べたことがあったので、ハーンのドイツ語版に対する関心がさらに膨らんできた。あれこれ調べるうちにもうひとつ面白い事がわかった。フランツォス訳のハーン作品ドイツ語版は六冊出ており、その売れ行きがよかったらしく、六冊から作品を抜粋した抄本 *Japanbuch* が出版されているのだが、その巻頭にハーン略伝を書いたのが、これもまたユダヤ系オーストリア人の作家シュテファン・ツヴァイクだった。いくら当時のオーストリア、特にウィーンにユダヤ人が多かったといっても、これはもう偶然ではありえない。ハーンの何かがこの人々を引き寄せたのだろう。

そうすると、この本そのもののことが気になりだした。挿絵が美しいのは前にも述べた通りだが、検索するうちに本の状態を示す写真も何枚か見ることとなった。装丁がまた美しい。版画風の文様が黒と金で描かれているようだ。これは欲しい。手に入るものだろうか。そこでおなじみの Abe Books で探してみると、ドイツやオーストリアから出品がある。しかしどれも一冊ずつのばら売りで、写真を見るとかなり傷んだものが多い。どうしたものかと思いながら検索を続けているうちに、南ドイツの古本屋に六冊揃っているものを発見した。状態は良さそうだ。しかもたいした値段ではない。つい衝動買いした。

二週間か三週間も待たせようか、その本が届いた。紙で何重にも包まれて、滑稽なほど丸々とした姿だ。表面に税関検査済みの紙が貼ってある。また嚴重に包んだもんだとつぶやきながら包み

「中古品、少し書き込みあり」

をほどこき、ようやく現物にお目にかかることができた。一目見て予想以上の美しさに驚いた。これが本当に100年以上前の本なのか？と疑問さえ抱いたほどだ。手に取ってみて、今度はその手触りに驚いた。生れて初めて経験する感触だ。何だ、これは？なぜこんなにすべすべしている？陶器の手触りを柔らかく温かくしたような感じだ。紙の手触りではない。ビニール？いや、100年前にはありえないし、ビニール独特の手にくつつくような感覚はない。表紙にはうっすらと手垢らしき汚れがついているが、それにしても紙や布の繊維のほつれなども全く見られない。不思議に思いながら送り状をじっくり読んで、ああ、そうかと納得した。「パーチメント装丁」と記されている。繊維のほつれがあるわけがない。パーチメント、つまり羊皮紙でできたものなど、博物館の陳列ケースに収まっている古文書の形でしか見たことがなかったので、手触りを知らなかった。写真③のように表紙は薄い象牙色のパーチメントに金と黒で型押しが施され、中は異国情緒たっぷりのユーゲントシュティール時代の版画が目を楽しませる。『ろくろ首』の冒頭の版画などは、写真④のように内容とぴったり合っていてドラマチックでさえある。このドイツ語版ハーンがドイツやオーストリア各地の図書館にも残っていることは、検索をしてわかっていたが、図書館によっては美術品コーナーに収めている。それも当然だと思わせる手の込んだ本だ。さらに送り状の説明と現物を照合して、六冊中三冊が初版本という、もったいないほど貴重なものを気安く手に入れたということに気づいた。これも何かの縁だろう。

そうなると、本の内容よりもこの本自体のことがいろいろと気になる。翻訳者はどういう人だったのか。また、この六冊を持っていたのはどういう人だったのだろうか。普通、文学作品を研究する際には、まず作者について、次に翻訳ならば翻訳者について研究するものだが、この場合は読者についても何かわかるかもしれない。



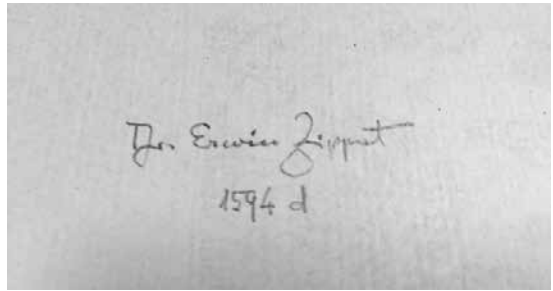
写真③ ハーンの *Kokoro* ドイツ語版



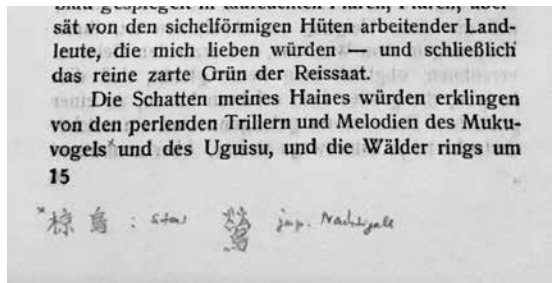
写真④ 『ろくろ首』挿絵

古本の所有者

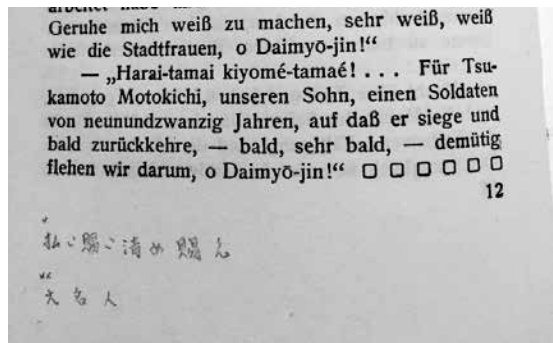
六冊のうち三冊の白紙ページには名前と数字が鉛筆で書かれていた。写真⑤がその一例。もう一冊にはその名前と数字を消しゴムで消した形跡もある。Dr. Erwin Zippert だろうか。数字はどれも 1594 で、そのあとにそれぞれ c、d、f の文字がある。これは所有者によるサインではなく、ツイパートさんの本を大量に購入した古本屋が整理のために書いたものだろう。六冊揃いなので、各巻に a から f まで記号をつけたものと思われる。本の中にはわずかに書き込みがあった。特に六巻本中第一巻に相当する *Kokoro* には、鉛筆で下線や感嘆符があちこちに書きこまれている。かなり念を入れて読んだのだろう。白紙ページの名前が本人のサインではなく、古本屋によるものと推測したのは、本文中の書き込みの筆跡がまるで違うからだ。さらに第二巻に当たる *Buddha* のページをめくっていくと、漢字の書き込みがあってびっくりした。(写真⑥)「鶯」という文字など、日本人でも咄嗟には書けない漢字だ。小さな字で *jap. Nachtigall* 「日本のナイチンゲール」と書き添えてある。日本文化の専門家か? と一瞬思ったが、その数ページ前の「大名人」という文字を見て、あ、違うな、と思った。(写真⑦) きれいな筆跡ではあるが、これは「大明神」の間違いだ。日本文化専門家ならばこのような間違いはしないだろう。それにしてもこの漢字を書いた人物も一体何者なのか。謎が深まるばかりだ。*Kokoro* の書き込みと比べるとアルファベットの筆跡も少しばかり違うようだし、ひょっとするとこの本には第二の所有者がいたのだろうか? すると私は二番目ではなく三番目の所有者な



写真⑤ ドイツ語版に記された所有者名
Dr. Erwin Zippert



写真⑥ *Buddha* 内の書き込み
「鶯 : Star」
「鶯 *jap. Nachtigall*」



写真⑦ 同書の書き込み
「払い賜い清め賜え」
「大名人」

のか？まあ、その可能性は低いだろう。

この本は 1905 年から 1910 年にかけて、一年に一冊のペースで Rütten & Loening 社から出版されたもので、ページをナイフで切り開く古風なタイプのものだ。六冊のうち半分が初版ということは、所有者はかなり早い時期にこの本を購入し、ナイフでページを切り開き、熱心に読んだのだろう。一体エルヴィン・ツイパートさんはどのような人だったのか。これも最初のうちはほとんど情報がつかめなかったが、同姓の人の情報の中に手掛かりがあった。1936 年ベルリン生まれで 2007 年にマールブルクで亡くなったクリスティアン・ツイパートという元クアヘッセン＝ヴァルデック司教であり神学者でもあった人物の父親として、エルヴィン・ツイパートの名前が見つかったのだ。それより先にドイツの Amazon の古書在庫にエルヴィン・ツイパート、クリスティアン・ツイパート共著の本があることがわかっていたので、これが親子での共著だったらしいと気づいた。この本の内容は皆目つかめなかったが、エルヴィン・ツイパートがどうやら宗教学者であり、精神療法医でもあった人物らしいということが徐々に明らかになってきた。

さらに検索を続けているうちに、books. google で情報が見つかった。Archiv für Geschichte des Buchwesens（「書籍販売業史資料」とでも訳せばいいだろうか）という、ドイツの書籍販売業の歴史資料集 61 巻の一部がデジタル公開されており、そこに彼の名前があったのだ。ベルリンのティリー・マイヤーという女性が経営していた Dahlemer Bücherstube つまり「ダーレム書店」というところで学識者や作家による講演会などが継続的に行われており、そこにエルヴィン・ツイパートも登壇している。1952 年 8 月 12、19、27 日には Die Angst und ihre Überwindung. Drei Betrachtungen. Stimmen des Fernen Ostens（「不安とその克服。三つの考察。極東の声」）という題で連続 3 回登壇、さらに同年 9 月 5、10、18 日にも登壇、10 月 9、16、23、30 日にも登壇、1955 年にも記載があるが、さらに読み進めていくうちに 1956 年の 5 月 26 日にエルヴィン・ツイパート博士を偲ぶ会が開催されており、彼が 1956 年 4 月 12 日に亡くなったことが記されていた。ツイパートさんは恐らくベルリンで東洋の宗教や哲学を研究していた人なのだろう。そう言えばこの人の名前を検索して、最初に出てきたのが *Große Befreiung* というタイトルの本だったが、このタイトルは、鈴木大拙が英語で書いた『禅学入門』のドイツ語訳でもあるらしい。*Große Befreiung* は直訳すると『大いなる解放』だが、禅の入門書ならば『大解脱』と訳すべきなのだろう。ハーンのドイツ語版を読んだ人たちの中には、このような東洋哲学・東洋宗教学の専門家もいたという証拠にもなりそう

ハーンのドイツ語版翻訳者

六巻本の翻訳者ベルタ・フランツォスについては、最初のうちはなかなか情報がつかめずに困惑したが、思いがけないところからその詳細がわかってきた。六巻本の巻末には本の広告や書評が

載っている。ツイパートさんが関心がなかったのか、切り開かれていない広告もあった。そういう袋状の広告のひとつをそっと切り開いてみると、そこに新刊本の翻訳者として「マリー・フランツォス」の名前があった。ベルタ・フランツォスの親族か？そこでマリー・フランツォスの名前を検索してみるとベルタの娘だということがわかった上に、マリーの方が情報が多かった。さらに、オーストリア国会図書館が発行している『ユダヤ系オーストリア文筆家ハンドブック』を部分的にデジタルで見ることができ、そこにフランツォス親子の略歴も記載されていることに気づいた。本の値段の高さに驚きながらも、ちょうど研究費が残っていたので取り寄せてみると、およそ「ハンドブック」という名前にふさわしからぬ分厚い三巻本で、ハンドブックどころか実に詳細な人名事典だった。フランツォスという姓の人物が何人もいるが、そのうち一人は以前どこかで名前を見たことのあるエーミール・フランツォスという著名な文筆家だった。ベルタ、マリー親子とどういった関係なのかははっきりとはわからなかった。あるサイトにはマリーのことをエーミールの姪と書いてあったが、そうではないようだ。

こういう血縁関係を調べる場合も、今は便利な家系検索サイトがあって、さまざまな人物の血縁関係を確認できる。この家系検索は歴史関係の確認などには非常に役に立つのだが、有名な貴族の家系を調べ始めると、面白いのと複雑なとでいつまでも検索してしまい、時間はかかるし目も疲れる。いつぞや音楽関係の仕事の準備でオーストリアの有名な貴族エステルハージー家の家系を辿っていた時など、傍系にも面白い記載が次々と出てくるため、検索の止め時がわからなくなって困った。

『ユダヤ系オーストリア文筆家ハンドブック』でも、ベルタについては出身地、没地、生没年以外はほとんどわからない。マリーについてはやや詳しく、数ヶ国語を操る翻訳者だったことがわかる。ハンドブックの記載とドイツやオーストリアのサイトのおかげでマリーの生涯がだんだんはっきりしてきたが、わかるにつれて憂鬱になった。1941年に freitod、つまり自殺している。ナチスが政権を掌握し、ヒトラーが自分の祖国であるオーストリアを併合したことは、オーストリア・ユダヤ人に最悪の運命をもたらした。ハーン抄本の序文・評伝を書いたツヴァイクが亡命のち自殺したのは有名なことだが、マリーもまた過酷な運命にさらされたらしい。執筆活動を禁じられた彼女はフランシス・マーロという偽名を使って活動を続けた。最終的にスイスへの旅行を、つまり亡命を試みたのだが、スイス旅行申請を却下された直後に自殺したのだ。

私は2017年の3月にウィーンに行き、二つのユダヤ博物館を見学したのだが、その時はフランツォス親子のことなど全く知らなかった。惜しいことをした。片方の博物館は「ユダヤ人広場」にあり、その前に記念碑がある。ドイツ語とヘブライ語で銘文が刻まれていたが、同じ内容だろうと推測してドイツ語の方を読んだ。オーストリアでは65000人のユダヤ人が殺害されたという内容だった。もうひとつの博物館では、ユダヤ人社会の中で女性たちが美術や文学など芸術方面で積極

的に活動していたことを知って、少々驚いた。たしかにドイツでも、またオランダでも、富裕階級のユダヤ人女性が芸術サロンを開催していた時代がある。アムステルダムのユダヤ博物館でそのような芸術サロンの主催者だった女性の肖像画を見て、有名なベルリンの芸術サロンの主催者とよく似ているなどと思って名前を見たら、ベルリンの女性の姪だったのでびっくりしたこともある。

ベルタ・フランツォス訳の六巻本がドイツ語圏でどのくらい読まれていたのかを考える目安として、ベルリンとウィーンの図書館の蔵書を検索してみた。どれだけ版行を重ねているかを知るためだ。予想通り、かなりの数の本が出てきた。が、あっと驚いたのが、ウィーンのオーストリア国立図書館のハーン関係蔵書一覧の最後の物件だ。ベルタ・フランツォス宛のハーンの手紙！データを見ると、なんとマリー・フランツォスの遺品に含まれていたものらしい。これは読みたい。早速オーストリア国会図書館に問い合わせ、手紙のスキャンデータを送ってもらうことにした。当然有料だが、そんなことを言ってる場合ではない。これも惜しいことをした、と悔やんだのは、2017年に私はオーストリア国立図書館も見学しているからだ。ただし豪華な内装で知られる「ブルクザール」だけだが。それにしてもユダヤ博物館同様、数ヶ月の時間差のせいで何も知らずにその場を訪れて情報探しをしそこなつた。まあ仕方がない。後述のハーン・シンポジウムには間に合わなかったが、ハーンがベルタ・フランツォスに宛てて書いた手紙のスキャンデータを数ヶ月かかって入手した。このデータを転載するとなると、オーストリア国立図書館の使用許可など面倒な手続きが必要になるので、学術論文でもないこの文には敢えて掲載しないが、手紙は一枚の紙の表と裏に書かれている。ハーンの字は丸っこくて可愛い。ちょっと意外だったのは、ハーンが翻訳に乗り気でなかったらしいことだ。文面からすると、ハーンはそれまでも翻訳許可を求める依頼をあちこちから受けていたが、相手が独占翻訳権を求めてくることに警戒心を抱いていたらしい。たしかに、それでは読者層が広がらないから、ハーン自身にとっても損でしかない。フランツォス宛の手紙にも、その警戒心が現れている。この手紙のデータが届くのとほぼ同時に、ハーンの手紙について書かれた論文を一本見つけた。*Reisen, Dialoge, Begegnungen* (『旅と会話と出会い』) というタイトルの日本学論文集に収められているペーター・パンツァーの論文 „Wenn Sie auch Hearn nicht so lieben wie ich ... “ (「たとえあなたが私ほどハーンが好きでなくても ...」) がそれだが、この論文には上述のハーンの手紙全文が掲載されている上に、各巻の印刷部数が詳細に記されているので、ハーンのドイツ語版がどの程度読まれていたかがわかる。

ユダヤ人の悲劇

ところで、例の分厚い「ハンドブック」のおかげで、ベルタがガリツィア出身であることを知った。当時はオーストリア領だったが、現在ではウクライナ領だ。彼女の出身地がガリツィアだとわかって、悪い予感しかしなかったが、その後ユダヤ関係機関の資料を調べて、ああ、やはりとまた

暗澹たる気分に戻った。ナチスによるホロコーストは誰でも知っている事実だが、ウクライナでの凄惨なホロコーストのことは日本ではあまり知られていない。ベルタはウクライナのブロディという町の出身だ。ブロディは東ヨーロッパに多数存在した「ユダヤ人都市」のひとつで、第二次大戦前はおよそ2万人の人口のうち半数以上がユダヤ人だったらしい。ところがナチスがウクライナに侵入してホロコーストを行った結果、ブロディのユダヤ人たちは殺されたり強制収容所に送られたりして、約1万人いたユダヤ系ブロディ市民のうち、戦後に生存が確認されたのはわずか88人だったという。

どの国であれ、暗黒の歴史があるものだ。しかしドイツのことを研究していると、暗黒の歴史が多すぎると感じることもある。特にユダヤ関係では信じがたいほど酷い資料と向き合うことが多い。私の場合、研究の始まりがユダヤ系詩人ハイネだったから、ある意味当然の結果ではあるのだが、とりわけナチス時代の状況を知れば知るほど、人間という動物の不可解さについて考えざるを得なくなる。正直なところ、この分野の研究は最初から鎮魂の心構えにも似た一種の覚悟がなくてはできない。虐殺された人々、それはユダヤ人だけではなく、シンティ、ロマと呼ばれる漂泊の民、共産主義者、共産主義国に住んでいるからというだけの理由で虐殺の対象となったスラヴ系の人々、あるいはそのどれでもなく、ナチスの政敵とみなされたり、単に何らかの恨みや妬み、疑心暗鬼などで密告されたドイツ人たちも多数含まれるのだが、彼ら一人ひとりが私たち同様生きていたという証と、その命が断ち切られた状況の残虐さに正面から向き合わなくてはならないからだ。だから興味本位でナチスやホロコーストのことをちょっと調べて知ったような気である人間や、ナチスの表面的な「カッコよさ」を真似する人間が許せない。そんな連中は、「百人の死は災難だが、一万人の死は統計だ」とほざいたナチスの「死の簿記係」アドルフ・アイヒマンとたいした違いはない。

フランツォス訳ハーンをめぐる物語は、ナチス時代には意外なことにその舞台を上海に移してさらに続いているのだが、詳細は2017年12月に富山大学で開催された「ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム」で報告し、その概要を『ヘルン研究3』に『ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち』という題で寄稿したので、詳しくは富山大学のリポジトリーでどうぞ。

ヘルン文庫の調査では、フランツォス訳ハーンがドイツ語の副教材として日本で複数出版されていたことも明らかになった。これも意外な発見だった。日本のドイツ語関係者が日本文化をドイツ語で表現したフランツォス版を見て、これは教材に使えるぞと思ったのだろう。ハーンは英語圏と日本をつなぐだけでなく、ドイツ語圏と日本をつなぐ役割も果たしていたのだ。

もうひとつのドイツ語版ハーン作品『ビダサリ』

ハーン・シンポジウムに参加した際に、再度富山大学のヘルン文庫の調査をさせていただいた。

この時はハーンの曾孫にあたる小泉凡先生もいらしたので、中島先生と共に本をあれこれ引っ張り出したり撮影したりと、楽しい調査だった。今回はハーンの蔵書以外にも、ハーン関係の書籍もチェックした。なにしろ珍しいドイツ語版を入手したあとだったので、ヘルン文庫にもあるかどうか、また他にドイツ語版がありはしないか、なども確認したかったのだ。さすがヘルン文庫、六巻本もちゃんとある。しかし私が持っているものとサイズが違う。六巻本はまず一年に一冊のペースで出版されたのだが、六巻出揃った段階で紙製ケースに六巻が収まったセットが発売されたことがわかっている。例の抄本の巻末に挿絵付きの広告があったのだ。抄本はトロント大学がPDFを公開しているので、デジタルでじっくり読むことができる。複数巻の本を箱に収めたセットのことをドイツ語では「カセット」と称するが、ヘルン文庫にあるのはその「カセット」だ。どうやら同じ原版を用いて余白を少し狭くした一回り小さな本を「カセット」として販売したようだ。このカセットにも古書店のシールが貼ってあったので一度は売られたものとわかったが、ケースに「正恭兄の誕生を祝するこころにて。一九二三、六、一九 - 二〇」という書き込みがあった。誰かが正恭さんに誕生日プレゼントとして贈ったものらしい。

しかしこのカセットよりも注意を惹いたのが *Bidasari* という本だった。この本は、ハーンのシンシナーティ、ニューオーリンズ時代の作品をまとめた『アメリカ雑録』にかなり近い内容で、出版は1925年、タイトルは収録作品のうち冒頭に置かれた物語のヒロインの名前だ。ドイツ語だと「ビダザーリ」という発音になりそうだが、マレー語圏の伝承らしいので「ビダサリ」と呼んだ方がよかろう。マレー版『白雪姫』のような物語だ。ハーンのドイツ語版はナチス時代になると姿を消すのだが、それ以前に出版されたドイツ語版は三つのグループに分けることができる。まずフランツォス版、次に『ゴーレム』の作者として有名なグスタフ・マイリンクがフランツォス版に含まれなかった作品を集めて翻訳したマイリンク版 *Japanische Geistergeschichten* 『日本の怪談』、そして来日前のハーンの世界を集めた *Bidasari*。これはフランツ・ファインという人物の翻訳で、この人もまたユダヤ系オーストリア人だ。

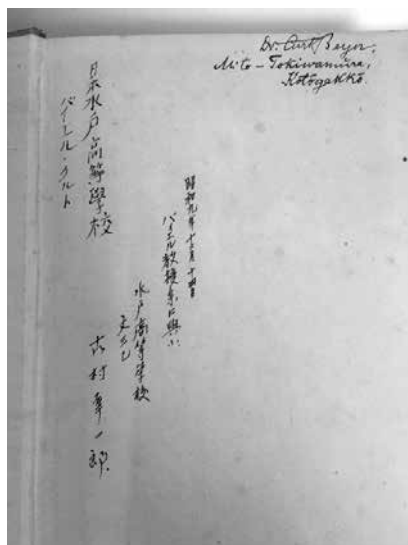
ファインについてもあまり多くのことはわからなかったのだが、ドイツの作家ハンス・ファラダがナチスによって収監されていた時期に牢獄で記した *In meinem fremden Land* 『見知らぬ祖国にて』にファインに関する記述がある。『見知らぬ祖国にて』はナチス政権下のドイツの状況を知る貴重な資料でもあるが、この本によると、ファインはローヴォルト出版社が雇っていた優秀な翻訳家だった。ローヴォルトは現在も営業中の出版社で、ドイツ文化の研究者にとっては膨大な伝記シリーズ *Rororo* の出版社として馴染み深い。ファラダによると、ナチスの「帝国文化院」からローヴォルト社に対し、ユダヤ人である翻訳者ファインについて「労働許可証を所有していないから雇用を止めるように」という警告が再三届いていたという。経営者エルンスト・ローヴォルトは最初のうちは無視していたが、警告が次第に脅迫めいたものになってきたところで「翻訳者フランツ・

ファインは許可証第 796 号により勤務しております。ハイル・ヒトラー。」と一行だけの返事を書いた。この件についてファラダは、帝国文化院はろくに調べもしないで警告書を作成していたのだろうと、皮肉を込めて記している。

富山大学での調査を終えてからも、『ビダサリ』のことが少々気になっていた。検索するとドイツにはこの本の古書がかなりあるようだ。ただしクロス装丁のため、どれも薄汚れている。日本の図書館にもあるだろうか？検索してみると、富山大学以外にも、熊本大学などいくつかの大学図書館に入っている。富山大学に、「これもある意味貴重な資料なので、一般に貸し出ししないように」と伝えておいた手前、ちょっと借りにくい。物は試しで「日本の古本屋」で検索すると、何と出てきた。「少し書き込みあり」という記述と共に写真がアップされていたが、この写真を見て即購入を決めた。所有者のサインらしきものが写っていたのだ。写真⑧が装丁、⑨がその見返しだが、右上に Dr. Curt Beyer, Mito-Tokiwamura, Kōtōgakkō、左上に少々アンバランスな字体で「日本水戸高等學校 バイエル・クルト」、その下には「昭和九年十二月十四日 バイエル教授余に與ふ 水戸高等學校 文三乙 古村幸一郎」と書かれている。どうやら水戸高等学校のドイツ語教員バイエル先生がこの本を学生の古村さんに贈ったものらしい。こうもはっきり書かれていると、どういう人たちだったのだろうかという好奇心が沸いてこない方がどうかしている。ネット検索すると、古村幸一郎さんの正体の方が先にわかった。全日本剣道連盟のサイトによると、古村さんは長野県剣連会長を 50 年も務め、平成 17 年に亡くなっている。そう言えばこの本を売ってくれたのは長野県の古本屋だった。恐らく古村さんが亡くなったあと、その蔵書が古本屋に委ねられたのだろう。この



写真⑧ *Bidasari* のクロス装丁



写真⑨ *Bidasari* 見返しの書き込み

サイトのおかげで、古村さんが水戸高等学校から東京大学に進学したこともわかった。昭和9年には茨城県代表として天覧試合にも出場されたそうだから、相当の剣豪だったはずだ。

一方、バイエル先生のことはなかなかわからなかった。水戸高等学校、現在の茨城大学には過去の教員名簿が残っているかもしれないが、そこまで調べるのも面倒だ、と諦めかけていた時に、あるサイトが目にとまった。『日瑞関係のページ』というサイトで、その中に「心の糧」というページがある。開いてみると、このサイトはそのタイトルの通り、本来は日本とスイスの関係の歴史を辿る目的で書かれたもののようだが、ドイツ関係の情報も多い。その中の「心の糧第一部」に「クルト・バイヤー」の名前があった。第二次大戦中の軽井沢に関する記述の中に、である。軽井沢か！ここでちょっとショックを受けた。そうだ、避暑地の軽井沢には日本の夏の暑さが苦手な外国人が多数いたはずだ。しかし戦時中に？ どういうことだろう。ありがたいことに、このサイトにはさまざまな書籍からの引用と、典拠に関する詳細な情報がついており、そのおかげで思いがけない方向に調査が広がった。サイトの管理人である大堀聰さんには、サイト名やお名前を記載する許可もいただいた。いくら感謝してもしきれないほどだ。早速典拠となった本のうち、特に気になる二冊を仕入れることにした。

そのうちの一冊の『ズザンナさんの架けた橋』は、タイトルは以前どこかで聞いた覚えがあったが、読んだことはなかった。これも古書を購入したが、少しばかりボールペンで傍線が書きこんである。しかも重要性があるとも思えない箇所に。読み方は人それぞれだが、こちらが重要性を感じないところに引かれた線は邪魔にしかならないので、いらっとする。まあ仕方ない。もう一冊の『戦時下日本のドイツ人たち』は新品を入手したが、上田浩二、荒井訓という著者名を見ておやおやと思った。どちらもNHKドイツ語講座などドイツ語教育部門ではよく拝見するお名前だ。とりわけ上田先生は1990年にIVG（ドイツ語学文学国際学会の略号）が慶應義塾大学で開催された際に、たまたま私が聴講に行った教室で司会をされていたので、この本で久しぶりにお名前を見てその時のことを思い出した。ちょうど研究発表が始まる頃から突然の雷雨となったのだが、上田先生が窓の方を見ながらドイツ語で「本日はこんなによいお天気で・・・」と挨拶を述べられたので、一同爆笑したのをよく覚えている。

「心の糧」、『ズザンナさんの架けた橋』、『戦時下日本のドイツ人たち』で知ったことだが、終戦時の日本にはおよそ3000人のドイツ人がいたという。この数字だけでも驚くが、ドイツ人以外の国の出身者も多数いたわけだし、終戦時に限らなければ、「ゾルゲ事件」で有名なソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲも在日ドイツ人の一人だった。当時の軽井沢は、関東一円で働く欧米人たちにとって、平時は避暑地として、そして戦時中は疎開地として格好の場所だったわけだ。もちろんドイツ人だけではない。イギリス人、亡命ロシア人、スペイン人などなど、軽井沢だけでも数十ヶ国の人々がいたというから、当時の日本の中ではちょっとした異次元の態をなしていただろう。関西

だとこれが六甲になる。たとえば、初めて日本でバウムクーヘンを製造販売した菓子店「ユーハイム」の創業者カール・ユーハイムは、終戦の一日前に疎開先の六甲のホテルで亡くなっている。

『戦時下日本のドイツ人たち』によれば、クルト・バイヤー（同書では「バイアー」と表記）は1944年に水戸高校での職を失い、軽井沢に移転してそこで終戦を迎えたが、戦後も日本に留まり、1954年に東京で亡くなったという。バイヤー先生に関する情報は、主にその娘さんのアンネリーゼ・バイヤーさんへの聞き取り調査で得られたものだ。当時日本にいたドイツ人は、ドイツ語教師、外交官、ビジネスマンなどさまざまな職業の人々とその家族だが、ユダヤ系の人もいれば、がちがちのナチス黨員もいて、ドイツ人がドイツ人を見張っているというぎくしゃくした奇妙な状態だったらしい。また、この本のおかげでバイヤー先生が元々日本学ではなくインド学の専門家だったこともわかった。バイヤー先生が古村さんに贈った本『ビダサリ』は巻頭にマレー語圏の物語を、巻末に『日本への冬の旅』を配置し、最後はハーンが横浜に到着して小舟に乗り換えて上陸する様子が描かれ、「私は日本の大地に立っている」という文章で終わっている。バイヤー先生はどのような気持ちでこの本を読み、そして古村さんに贈ったのだろうか。この本にはフランツ・ファインによる短い序文がついている。わずか1ページ半ほどだが、そこだけ赤ペンで何箇所も下線が引かれ、余白には赤線部分の単語の意味が書き込まれている。ところが本文にはそういう書き込みが全くない。序文だけは読んでみたものの、興味が持てずに放り出したのだろうか。ドイツ語の本ではあるが、内容はアメリカや西インド諸島に関するものや幻想的なエッセーなど多岐に渡るものなので、ドイツ語学習者の興味を引かなかったのかもしれない。

情報源となったサイト、そこから知った二冊の本を読みながらしみじみ思った。長年ドイツ文学やドイツ文化の研究をしてきたが、『ビダサリ』という古びた一冊の本と出会わなかったら、戦時中の軽井沢のドイツ人社会という特殊な世界のことを全く知らないままだったに違いない。こういう感慨に耽りながら『戦時下日本のドイツ人たち』のあとがきまで読み進んで、また「あっ」と驚くことがあった。この本の情報は、たとえばバイヤーさんの娘さんのような、当時を知るドイツ人からの聞き取り調査で得られている。日本在住の人々については上田先生が、ドイツでは荒井訓先生が聞き取り調査をなさったそうだが、そもそもこのプロジェクトを行うに当たって上田先生が協力を仰いだのが、ケルン大学日本学科のフランツィスカ・エームケ教授だったというのだ。さらに、この本はエームケ教授が中心となって作ったインタビュー集の日本語版として計画されていたのだが、日本の出版事情を考慮して新たに日本語で書き起こしたということなども、あとがきに記されていた。まえがきにも、ドイツでの聞き取り調査はケルン大学日本学科が中心になって行ったと記されていたのだが、そこにはエームケ教授の名前は書かれていなかった。この名前になぜ驚いたかという、例のハーンの手紙を引用した論文が収められていた論文集 *Reisen, Dialoge, Begegnungen* はエームケ教授の業績を記念して編まれたもので、「フランツィスカ・エームケ記念

「中古品、少し書き込みあり」

論文集」のサブタイトルがついており、巻頭には教授の写真まで掲載されていたからだ。

ここでまた輪がつながった。もちろんドイツで日本学科を置いている大学はそう多くないだろうし、ケルン大学の日本学科は有名だ。ドイツと日本の関係を探っていくうちに同じ人物の名前に出会うことは十分ありうる。しかし、古本にそそられた好奇心からハーン作品の翻訳者ベルタ・フランツォスのことを追いかけているうちに別の古本に出会い、そこから軽井沢のドイツ人社会という未知の世界を知り、それがまたさらに同じ人物の名前につながるとするのは、考えようによっては大変な偶然だ。

だから古本漁りは止められない。次はどのような輪がどこにつながるのやら。

論文ではないとはいっても、最後に情報源として使用させていただいた主な文献・ウェブサイト一覧だけは付けておこう。

文献

上田浩二、荒井訓共著『戦時下日本のドイツ人たち』集英社新書 2003年

ズザンナ・ツァヘルト著、雪山香代子、佐々木五律子訳『ズザンナさんの架けた橋』集英社 1996年

Österreichische Nationalbibliothek, Wien: *Handbuch Österreichischer Autorinnen und Autoren jüdischer Herkunft Bd.1*
: De Gruyter 2002

Andreas Niehhaus, Chantal Weber (Hg.): *Reisen, Dialoge, Begegnungen* : LIT Verlag 2012

ウェブサイト

『日瑞関係のページ』内「心の糧(戦時下の軽井沢)第一部」<http://www.saturn.dti.ne.jp/ohori/>

全日本剣道連盟ホームページ <http://www.kendo.or.jp/>

Holocaust Education & Archive Research Team : www.holocaustresearchproject.org/

